形の異なる２種の棺（ひつぎ）　–土師質亀甲形陶棺（はじしつきっこうがたとうかん）と円筒棺（えんとうかん）–

赤田横穴墓群（あこだおうけつぼぐん）９号墓（西大寺赤田町一丁目）

赤田横穴墓群は、６世紀の後半から７世紀の中頃にかけて作られた横穴墓群です。陶棺とよばれる素焼きの棺に遺体を納めて埋葬した横穴墓が多いことが特徴の一つです。

これまでに１～９号墓の発掘調査を行っており、９号墓は出土した土器から７世紀中頃に作られたことがわかります。

陶棺を納める墓室は、長さが5.7ｍ、幅が2.5ｍあり、墓室の中には土師質亀甲形陶棺１つと円筒棺２つの合わせて３つの棺が納められていました。陶棺の中からは、金色の耳環（じかん）も出土しました。また、副葬された土器とともに、奈良時代の土馬（どば）も見つかっています。このことは、奈良時代にも横穴墓の中に人が立ち入ったことを示しており、先祖に対する何らかの儀礼が行われていた可能性も考えられます。

赤田横穴墓群の位置（1/30,000）

棺は後世の盗掘で壊されてはいましたが、陶棺は墓室のほぼ中央、円筒棺は墓室の西壁沿いと北壁に沿う位置で見つかりました。

９号墓出土の円筒棺は、奈良県内では初めての例で、亀甲形陶棺との埋葬方法や時期の違いを示しています。

９号墓墓室内の亀甲形陶棺・円筒棺出土状態（東から）

赤田９号墓出土の陶棺と円筒棺

亀甲形陶棺は、棺身と棺蓋をそれぞれ２分割して焼き上げ、再び組み合わせて使用しています。棺身は長さ 117 ㎝・幅 48 ㎝・高さ 44 ㎝で、円筒形の脚が底に８脚あり、口の周りには鍔（つば）のような蓋受けがめぐります。古い陶棺にみられた突帯の貼り付けはみられず、大きさもかなり小さくなっています。蓋は片側だけを復原することができました。身と違って細い突帯を貼り付けています。また円柱形の突起が二つ付いており、奈良市内から多く出土する陶棺にはほとんど例がありません。蓋に突起のある７世紀の陶棺は、岡山県美作（みまさか）地方で多く出土することが知られています。陶棺の二大製作地であった大和北部と美作との間に交流があったことを示しているようです。

円筒棺には大小二つがあり、大形品は口径 29.5 ㎝・高さ 85.1 ㎝、小形品は口径 26.6 ㎝・高さ 67.4 ㎝です。いずれも平底で、自立することができます。口縁部から６～８㎝下に陶棺と同様の蓋受けがめぐり、半球形の蓋が載るようになっています。蓋受けには径 0.5 ㎝前後の穴が８～ 20 ㎝間隔にあいており、蓋がはずれないよう紐で縛って固定するための紐穴ではないかと推測できます。

陶棺・円筒棺ともに、大人の遺体をそのまま納めるには小さすぎますが、単純に子供用と考えることもできません。７世紀中頃の陶棺はすべてこのように小型化する傾向にあるからです。遺体を骨化させた後、骨だけを納めるための再葬用容器として使用されるようになった可能性も考えられます。

９号墓出土の陶棺（左）と円筒棺（右２つ）

発行　奈良市教育委員会　平成２７年７月